

## 4月23日討論要旨（博覧会における「文明」と「野蛮」の階梯）

林礼釗（STA）

### Guiding Question

本講では特に、第五回内国勸業博覧会の場外余興として企画された、日本内外の人びとを生きのまま展示する「人類館」に注目します。この企画で、清国人が展示されようとしたのですが、当時の留学生は反対運動を繰り広げ、清国人の展示を断念させています。しかし、この抗議の言説は、今日的には「政治的に正しくない（politically incorrect）」ものだったといわれています。A どこに問題があったのでしょうか？ B そして、その問題を、現代の中国人と日本人は克服できたといえるのでしょうか？

討論では、両問題について主に以下の意見が提起された。

**問題 A** 1、清の留学生の抗議は「差別」そのものに対する抗議ではなく、自分らが「劣等民族」と同等に扱われたことに抗議したところに問題があった。植民地主義を支持しており、「文明」と「野蛮」の構図自体には特に抗議していなかった。2、「上下関係」（「文明」か「野蛮」か）に反論し、構図自体に反論がないというところに問題がある。また纏足女性の件についていえば、人権にかかわるところにも問題がある。3、清の留学生は自分の国のことだけに反応があり、他の民族が展示されていることを否定していなかった。「野蛮」ということ自体の存在を認めている。この問題は当時の植民地時代の諸問題の中のひとつの典型だと思う。4、「野蛮」と「劣等民族」の存在を認めているところに問題がある。

**問題 B** 1、「文明」と「野蛮」というワードが「先進国」と「発展途上国」という名前が変わり、いまだに両者を分ける意識がまだある。「日本は先進国、中国は途上国」といった認識が一般的に存在し、しかし中国はアフリカや東南アジアと一緒にといわれると、「そうではない」と。そういった論理からすれば、二元論的な意識はまだ残っている。2、現在でも観光業などのところで、「民族性」といったものを「展示」し、利用している。それはもしかしてこういう問題に変わっていくかもしれない。3、博覧会の開催には、西洋大国に認めてもらいたいという日本の狙いがあった。現在の中国を考えると、中国は経済が発展し、国が豊かになり、そして世界に認められつつある。この意味では、克服できたと考えている。4、「政治的に正しくない」という言葉の定義について、日中の間には相違が存在し、定義が統一していないことで、討論自体が難しいと思う。このことからすれば、克服できていない。

**担当教員の総括：**「文明」と「野蛮」というきわめて差別的な構図自体が批判されないまま残っていたところに問題があった。討論の中にあつた「先進国」と「発展途上国」との論点について、確かにそういえるかもしれないが、そもそも「先進国」や「途上国」という言い方が何を意味しているかをさらに突き詰めて考える必要がある。また、観光業についての指摘があつたように、民族性を「利用」する、あるいは「伝統」を「利用」する（伝統的な生活をしている人たちを見せ物にするような）ことは一概に悪いとはいえないが、「文明」と「野蛮」の構図はどこかに隠しているかもしれない。そして、討論に出てきた経済の発展によって世界に認められたことと構図への克服この両者の関連について、確かに当時日本の立ち位置は微妙であつた（西洋からすると日本は下、アジアのなかでは日本は上であるという自己認識）。しかし今日の中国の立場とは微妙に違うのではないかと。今回の話しでつかんでおきたいのは、物事を批判的に見ることである。批判的に見るということは物事をただ疑って見るのではなく、これが一体どういうことなのかを考えながら作業していくことが大事である。